

第22回区民車座集会意見交換内容（麻生区）

- 1 開催日時 平成28年7月16日（土） 午後3時15分から午後4時45分まで
- 2 場 所 麻生区役所4階第1会議室
- 3 参加者等 参加者18名、傍聴者約37名 合計55名
昭和音楽大学・田園調布学園大学・日本映画大学・和光大学・麻生区町会連合会

<開会>

司会：それでは、定刻となりましたので、ただいまから第22回区民車座集会を始めさせていただきます。

私は、本日の司会を務めさせていただきます、麻生区企画課の佐藤と申します。よろしくお願いいたします。す。（拍手）

今回は、「若者の地域参加」をテーマに、麻生区の各地域において活動いただいている大学の皆様から取り組みの発表をいただき、意見交換を行ってまいります。

本日発表いただきますのは、お手元の次第にもございますとおり、昭和音楽大学様、田園調布学園大学様、日本映画大学様、和光大学様でございます。

また、地域の代表といたしまして、麻生区町会連合会の皆様にもお越しいただいております。

次に、行政からの出席者を紹介させていただきます。福田紀彦川崎市長でございます。

市長：どうぞよろしくお願いいたします。（拍手）

司会：次に、北沢仁美麻生区長でございます。

区長：どうぞよろしくお願いいたします。（拍手）

司会：それでは、開会に当たりまして、福田市長から御挨拶を申し上げます。

市長、お願いいたします。

<市長挨拶>

市長：皆さん、こんにちは。きょうは土曜日ということで、お休みにもかかわらずお集まりをいただきまして、ありがとうございます。

区民車座集会というのは、ほぼ毎月1回という形で、各区をめぐってやっていますが、今回から4巡目ということで始まります。

今回、4巡目は、各区でテーマを調整して決めているのですが、大体の区が若者の地域参加について議論したいということが多くて、そのトップを切って、きょうの麻生区ということになります。

先日の参議院選挙から70年ぶりに投票年齢が引き下げられて、18歳からということになりましたし、そんなこともあるのかもしれませんが、いかにそれぞれの地域で若者が地域に参加してもらいたいという思い。行政もそうですし、あるいは、地域の皆さんもそういうふうには思っています。

きょうは、麻生区がネットワークを組んで、6大学のうちの4大学が参加していただいて、事例を発表していただくということです。ぜひ私にも教えていただきたいし、いいディスカッションができればなと思っています。

きょうはよろしくお願いいたします。（拍手）

司会：ありがとうございました。

<各大学からの発表と意見交換>

司会：それでは、各大学からの発表と意見交換に入ってまいります。

初めに、昭和音楽大学の皆様から、百合ヶ丘地区での音楽療法の取り組みなどについて、発表をお願いいたします。

小川さん：こんにちは。皆さん、お招きいただき、ありがとうございます。

私は、昭和音楽大学音楽療法コースの小川カノンです。

田中さん：田中聖奈です。

小川さん：本日はよろしくお祈いします。（拍手）

では、これから日ごろのボランティア活動の紹介などを通して、音楽を学んでいる学生である私たちがどのように地域にかかわっているのかということをお話ししていきたいと思ひます。

まず初めに、私たちの大学について少しお話しさせていただきます。

昭和音楽大学は、大きく分けて2つの学科がありまして、まず最初に、音楽表現学科というものは、ピアノや声楽、それから、合唱指導者コースや管弦楽などのコースがあります。

また、もう一つは、音楽芸術運営学科というもので、舞台スタッフコースやアートマネジメントコース、バレエコースやミュージカルコースなどがあります。その中に音楽療法コースは所属しています。

私たちの音楽療法コースでは、3、4年時に音楽療法の実施を学内外で行っています。学内には、音楽療法実習施設、Andanteというものがあひまして、そこに地域の障害を持った子供たちが毎週通っています。

学外では、以上のような施設に訪問して実習を行っています。

このような環境は、地域の特に支援の必要な方々となつながりを持ついい機会になっています。そのため、私たちの音楽療法コースの学生は、ボランティアとして自主的に出かけて、さまざまな音楽療法活動を行っています。

ボランティア先としては、学校のある新百合ヶ丘を中心に、子供のデイサービスや成人の障害者施設、そして、高齢者の施設などを訪問しています。

参加される方々の年齢は、とても多岐にわたっています。

また、音楽療法とは別に、小学校の支援級での学習支援サポーターとして活動している人もいます。

きょうは、そんな数々のボランティアの中から、団地の集会所で行った音楽療法的ミニコンサートの地域参加についてお話をさせていただきます。

この集会所というのは、百合ヶ丘にあるUR都市機構、サンラフレ百合ヶ丘さんの集会所のことです。

サンラフレ百合ヶ丘さんは、19号棟まであり、すぐそばにはスーパーや商店街、公園などがそろっているので、子供から御高齢の方まで皆さんが生活しやすい団地となっています。

この活動を行うに当たり、URの方から、団地の特に外出の機会が減ってしまう高齢者の方々に向けて、外出する機会を設けたい、また、活動を通して団地全体の活性化を図りたいという御相談を受けました。

そこで、私たちは、今回のコンサートを、「誰もが気軽に参加でき、音楽を通じて楽しさを共有できる場所を提供しよう」というスローガンを掲げて、開催しました。

開催は、今年の2月25日、11時から12時の1時間でした。参加者は、一般参加者に加えて、集会所

の上にある保育園の園児も37名程度参加しました。

ここのグラフに出ている職員というのは、URの職員の方々と保育園の職員の方のことです。

全体は、合計で60名程度にのぼりました。

これが当日のプログラムです。1番以外の項目は、全て参加者の方でも何らかの形でかかわってもらう参加型コンサートを行いました。

今回は、時間の関係上、この中から2つだけ御紹介させていただきます。

まずは、2番目のボディーパーカッションについてです。

皆さん、“ボディーパーカッション”という言葉聞いたことがありますでしょうか。ボディーパーカッションというのは、自分の体を楽器に見立てて音を鳴らし、リズムを刻むということです。

今回は、ここに出ているように、腿を2回、手拍子を2回、それから、肩を2回、最後に手拍子を1回。この項目をやりました。

一回皆さんにも体験していただきたいので、お手元の資料などをどかして、一緒にやっていただけますか。

最初は腿を2回です。それから、手拍子を2回。その後、肩です。肩は、こうでもこうでもどっちでもいいので、2回叩ければ大丈夫です。最後に1回。これを連続して行いました。

じゃあ、続けてやってみます。行きます。

さん、はい。腿、腿、（拍手）（拍手）、肩、肩、（拍手）という感じです。ありがとうございます。

当日は、ここに書いてあるように、これを1人ずつ動作を確認して覚えていただいて、ゆっくりのスピードから練習を始めて、最後は徐々に速度を速めて、CARPENTERSの「Top Of The World」という曲に合わせて皆さんでやりました。

段階を踏んだのは、当日、園児とか高齢者の方が多いということだったので、段階を踏んで、皆さんができるように仕組みを考えてやってまいりました。

こちらが当日の様子になっています。皆さんのお手元の資料にはありませんが、URの方が作成してくださったものです。今回の資料も、相談したところ、快く御承諾してくださいました。

ボディーパーカッションは、園児だけではなく、保育士さんや御高齢の方も熱心に取り組んでくださいました。

じゃあ、次に、4番の合奏についてお話しさせていただきます。

この合奏では、小さな楽器を1人に1つずつ配り、皆さん自由に演奏してもらいました。

このスライドに載っているあめのようなものは、楽器で、実物を持ってきたのですが、こういうかわいい、ポットドラムという楽器です。とても子供に人気のある楽器でした。

また、そのほかにも、こんな音のする、マルチトーンタンクという楽器なのですが、こういうものや、あとは、ちょっと操作が難しい、こきりこという楽器。こういうような珍しい楽器が学校にはたくさんありますので、こういうのを持って行って、皆さんお1人ずつに配って、演奏をしてもらいました。

この場で使った2曲は、幅広い年齢層の方にも知られているもので、自然と体が動いてしまうような、ノリのいいものを選びました。

2曲目の「風になりたい」では、参加者の子供と大人の方の中からそれぞれ代表を決めて、前に出てきてもらい、カホンとボンゴで演奏してもらいました。

これが実際の様子です。大人の方が子供に楽器を「どうぞ」と言って回してくださる様子も見られました。

では、次に、URの方が参加者の皆さんにアンケートを実施してくださいましたので、その中から幾つか御紹介します。

「とてもよかった」という意見のものから、「子供用の活動がもっとあるとよかった」というものや、[自治会経由で参加を呼びかけて、大人の参加人数をもっと多くする]といった御意見などもいただきました。

また、それとは別に、私自身に直接声をかけてくださった御年配の方から、子供からエネルギーをもらった、子供と関わってよかったという感想をいただきました。

今回の活動を通して見えてきたことを図で説明したいと思います。

まず、活動が始まる前の様子がこれです。初めは、参加者の中で一番人数の多い子供たちに大人が注目をしているという形でした。

そこから活動が進み、私たちが音楽とともに皆さんにかかわっていく中で、ふだんかかわりのない方々同士が話をしたり、お互いに顔を覚えたりして、新たなつながりが生まれるということが考えられました。

つまり、若者が地域に参加をすることで、世代の違う方々をつなぐことができ、さらに、音楽を通して場の共有ができやすくなるのではないかと考えます。

そして、この活動は、1回だけではなく、継続していくことが大切なのではないかと思いました。

ここまでで私たちの発表を終わります。

Let's tryということで、ボディーパーカッションを皆さんにも挑戦していただきます。先ほどやっていた覚えているかと思いますので、もう一度思い出して、一緒にお願いします。

では、先ほど一連の流れはやりましたが、今回はもう少し長くして、スピードも速くしてやりたいと思います。

では、最初は腿からです。行きます。

さん、はい、腿、腿、（手拍子）（手拍子）、肩、肩、（手拍子）（手拍子）、もう一度、腿、腿、（手拍子）（手拍子）、肩、肩、（手拍子）（手拍子）、もう1回、腿、腿、（手拍子）（手拍子）、肩、肩、（手拍子）（手拍子）。

ありがとうございます。では、皆さん、これを覚えておいてください。

というのも、次は、Let's singということで、「WAになっておどろう」をご存じだと思いますが、これを皆さんで歌ってみたいと思います。恥ずかしがらずに皆さんお願いします。特に、若者の大学代表の方は代表してお願いします。

では、さん、はいで始めていきます。

さん、はい。“オ～オオ～ さあ輪になって踊ろ ラララララ～ すぐにわかるから オ～オオ～ さあ輪になって踊ろ ラララララ～ 夢をかなえるよ”。

ありがとうございます。皆さん、両方やってくれたださったと思うのですが、それは次にやろうと思っていたデュアルタスクというものです。

今、2つの課題を同時にやっていたと思うのですが、これは介護予防などでも行われているもので、とても脳にとっては刺激のあるものです。これを次に皆さんともやろうと思っていたのですが、やっていたので、ちょっとスピードを速くしてやって終わりにしたいと思います。先ほどよりも速く、このぐらいで行きます。

では、皆さん、お願いします。

さん、はい。“オ～オオ～ さあ輪になって踊ろ ラララララ～ すぐにわかるから オ～オオ～ さあ輪になって踊ろ ラララララ～ 夢をかなえるよ”。

ありがとうございます。皆さん、全然大丈夫そうですね。ありがとうございました。こういうことを当日も行いました。

では、これで私たちの発表を終わりにさせていただきます。

御清聴ありがとうございました。（拍手）

司会：ありがとうございました。

では、意見交換につきましては、市長に進行をお願いいたします。

市長：昭和音大の皆さん、ありがとうございました。

すごいですね。音楽療法というと、医療なのかなと思っていました、楽しく、いろんな世代をつなぐことができるのも、音楽療法的な取り組みということでよろしいですか。

小川さん：はい、そうです。音楽を使ってコミュニティーをつくるだとか、新しいコミュニティーをつくっていく。コミュニケーションの手段として音楽を使っていくような形です。

市長：なるほど。最初に御紹介があったような特別支援学校だとか、あるいは、福祉的なものが必要な方たちだけじゃなくて、こういったコミュニケーションの一つの道具としても使えるということですね。

小川さん：はい、そうです。

市長：ありがとうございます。すばらしいです。

実は、きょう、4大学の人たちに共通して聞きたい話なのですが、昨年、川崎市で若者の皆さんにアンケートをやりました。13歳から30歳までの3,000人の方を対象にして行ったのですが、地域での活動をしていますか、していませんかということで、参加していると答えた方はわずか10%でした。参加していないが89.5%。

参加していない理由は、地域でどのような活動がやられているかわからないというのが一番多くて、37.4%。参加するのに時間の余裕がないからというのが2番目の23.1%。地域の活動に興味がないというのが14.5%と3位だったのです。

逆を返せば、85%は興味がないと言っている人以外は、時間を若干調整していただければ地域に参加する可能性があるんじゃないかということで、前向きに捉えれば、そういうことを思ったんです。

今まで、学校のプログラムとして、例えば、学校に行ったりとか、あるいは、支援が必要な方に学校に来てもらったりというのがあったと思うのですが、公的などころ以外、URの住宅に出ていくというのは、ある意味すごいことだと思うんです。

これはURからのお願いだったのですか、きっかけは。

小川さん：そうですね。きっかけは、私たちが学園祭で音楽療法のミニコンサートをやって、それを見に来てくださって、ぜひ集会所でも、ということで、お声をかけていただきました。

市長：URの人たちが見に来て、そこで、うちの団地でも、という話につながったわけですか。

小川さん：はい。

市長：なるほど。

先ほどアンケートのところで、自治会の人たちにも声をかけて、もう少し大人の人もいたほうがよかったという意見がありましたよね。自治会の方には呼びかけなかったのですか。

小川さん：URさんが呼びかけを行ってくださったんです。

市長：なるほど。

せっかくですから、きょう、麻生区の町内会の役員をやっている皆さんも来ていただいておりますので、こういう取り組みを聞いてどういうふうに思いましたか。中島会長、ちょっとコメントをいただいてもよろしいですか。

中島さん：私は、大変興味を持って、参加したいと思います。

小川さん：ありがとうございます。

市長：こういうことをやっているんだというのを、逆に僕もびっくりして知りましたが、情報をもっとあると、自治会側もいい情報ですよ。

何か御発言をいただく。どうぞ。

藤野さん：実は、私、ただいま映像に写っておりました、サンラフレの自治会の会長でございます。これは、URと私ども自治会が提携いたしまして、こうなつたことございまして、最初はヤマハの方をお願いして、うちの団地でクリスマスコンサートとかスプリングコンサートをやっていたんです。

昭和音大の方がいらっしゃるといふことで、そちらに働きかけてということ、URと私ども自治会が考えてお願いしたような次第でございます。

市長：そうですか。ありがとうございます。すばらしい取り組みですね。

小川さん、ほかの地域からリクエストがあった場合には、要相談ということで、相談を受けていただけるんでしょうか。

小川さん：そうですね。私たちが4年生なので。これは自主的にボランティアとして私たちが行っているの。サークルではないので。私たちの課題としては、次の後輩たちにこういう活動をどうつないでいくかというところを考えています。

市長：なるほど。サークル化する動きというのはこれからやっていただけるんでしょうか。

小川さん：……。

市長：個人でつないでいくってすごく難しいですよ。

先ほど続けていきたいなということがありましたが、田中さんも4年生ですか。

田中さん：はい。

市長：田中さんと小川さんが卒業したらなくなっちゃったということにならないようにしたいですね。

ほかの大学の皆さんから何か御意見ないですか。すばらしいとか。大丈夫ですか。高橋さん、大丈夫ですか。

はい、わかりました。ありがとうございます。

継続していくには、先ほど申し上げたサークル化だとか、もっと仲間を増やしていくとかという取り組みが必要なかもしれないですね。

何か皆さんから質問ないですか。

区長もよろしいでしょうか。よろしいですか。

すばらしい取り組みを本当にありがとうございます。

でも、ボディーパーカッションというのがこの部屋にいる人たちみんなをつなぐことができたということで、すばらしい取り組みなので。こういう手法があるんだなというのを初めて知りました。本当にありがとうございました。

小川さん：ありがとうございました。（拍手）

司会：それでは、続きまして、田園調布学園大学の皆様から、東百合ヶ丘地区にございます大学構内で開催されているミニたまゆりの取り組みについて発表をお願いいたします。

渡邊さん：皆さん、こんにちは。田園調布学園大学です。本学は、子どもが作る町 ミニたまゆりについて紹介していきます。

初めに、田園調布学園大学について少し説明させていただきます。

所在地は、川崎市麻生区です。具体的にいうと、ヨネッティー王禅寺の前に建っています。

総学生数は1, 200人の、福祉と保育の専門大学となっております。さまざまな地域貢献活動を企画・運営している学校です。最近では、麻生区、宮前区と連携させていただいております。

本学の地域貢献イベントである子供がつくるミニたまゆりは、職業体験を通じて、子供たちが、社会の仕組み、職業観を養うイベントとなっております。

2005年から開催し、現在では、35の外部団体の協力を得て、地域とともに作り上げる大きなイベントに成長いたしました。2日間の来場者数は3,000人にも及びます。

次に、ミニたまゆりの状況を示したビデオがありますので、そちらをごらんください。

「ビデオ上映」

以上がミニたまゆりのビデオです。

職業体験というと、キッザニアを思い浮かべる人がいると思います。そこで、簡単に違いを説明させていただきます。

労働体験、消費体験は、ミニたまゆりもキッザニアもともに経験することができます。しかし、子供会議、納税体験、市長選挙、まちづくり体験は、ミニたまゆり独自で、キッザニアでは体験できないものとなっております。

参加団体、企業が全国規模のキッザニアに対し、ミニたまゆりは地域に密着したものです。参加費も300円と高くなく、気軽に来られるところが特徴です。

ミニたまゆりは、社会の仕組みを学び、児童が社会参加、政治に対する興味を促すことを目的としています。

参加者の声といたしましては、社会の仕組みを学ぶいい機会になった、多くの職業を体験し、子供の職業意欲が向上した、子供の働く意欲に驚かされた、親子で税金について考えるいい機会になった、いつも憧れている職業を体験することができたと、保護者の方にも大変好評で、子供たちからも毎年楽しみにしていま

すといった声が寄せられています。

本学の地域貢献活動が認められ、昨年行われた第9回大学自慢コンテストでは、数ある大学の中で全国優勝することができました。

ここで改めて自己紹介をさせていただきます。

田園調布学園大学心理福祉学科、2年の渡邊紗菜と申します。よろしくお願いいたします。（拍手）

昨年は総務グループ長をやらせていただきました。ことしの第12回ミニたまゆりでは実行委員長を務めさせていただきます。

私がミニたまゆりに参加しようと思ったきっかけは、自分を変えたいと思ったからです。私は、今までイベント事は面倒くさいと感じ、いつも受け身な人間でした。みずから進んで何かをやり遂げたい、企画したいと感じたことはありません。

高校を卒業し、大学生となったとき、このままでいいのだろうかと考えました。私になりたいのは社会福祉協議会のボランティアコーディネーターです。少なからず、受け身な人間のままではいけなと感じました。

そんなとき、授業の中でミニたまゆりについて知り、これを経験すれば自分を変えられるのではないだろうかと思い、参加を決意しました。

全体を見渡せる総務に所属することで、自分の狭い視野を広げるとともに、ミニたまゆりに参加する子供や保護者の方、麻生区長を初め、警察署署長や消防署署長といった行政の方々ともお話しする機会ができ、それを自分の強みに変えることができました。

以前の私では考えられないような成長をミニたまゆりを通じてできたと思います。この活動をもっと多くの人に知ってもらい、ミニたまゆり自体や、かかわる人も成長できるイベントにしたいと思っています。

稲葉さん：こんにちは。私は、田園調布学園大学子ども未来学科4年の稲葉遼と申します。よろしくお願いいたします。（拍手）

2年前、ミニたまゆりの学生実行委員長をやらせていただきました。将来の夢としましては、保育者や幼稚園教諭などを目指しております。

私は、ミニたまゆりを通じて様々な方々と出会いました。たくさんのアイデアや個性を持つ子供や、ミニたまゆりをより良くしようとする学生の方々や先生方、ミニたまゆりを応援してくれる地域の方々、それぞれが1つの目標に向かってミニたまゆりをつくっていくことに、私はとても魅力を感じております。

学生代表として人の上に立ち、中心となって進行する難しさについて学びました。さまざまな立場の方々から寄せられる多くの意見を大切に、どのように組み込んでいけばよいのか、深く考え、実践させていただきました。

それらを難しく考えつつ、安心して堂々としてやれたのは、先生や周りのスタッフの信頼や援助があったからだと感じております。

本日、皆様の前に立ち、お話しさせていただけるような場を設けていただくことができたのも、声をかけていただいた先生の信頼があったからだと思っています。

私は、今後も信頼関係を大切に、活かしていきたいと思いました。私にとってミニたまゆりは、信頼というものを形にして、学び合えたものだと思っています。

このミニたまゆりの活動について、川崎市市長にお願いがあります。

昨年、川崎市の協力のもと、食品サンプルのお店を出させていただきました。とても好評でした。今年度も食品サンプルを行いたいのですが、それ以外にも川崎市の特色のある産業を紹介していただけたらなど期待しております。

ほかにも、子供たちに本格的な市長選挙を体験してもらうために必要な投票箱の貸し出しや、子供たちと行う市議選についての助言や指導、実際、市議会の見学などをお願いしたいと思っております。

最後に、来年2月に開催される、私たちがつくり上げた“子供の町 ミニたまゆり”に川崎市市長もぜひ遊びに来てください。

以上、私たちの発表を終わります。

御清聴ありがとうございました。（拍手）

司会：ありがとうございました。

では、市長、お願いいたします。

市長：田園調布学園大学の皆さん、ありがとうございました。

私もさっき写真が出てきてびっくりしましたが、2度ほど参加させていただいて、すばらしい取り組みをやっているということに感謝申し上げたいと思います。

特に、2日間で3,000人も地域の子供さんたちが来るということで、あれはどういうふう呼びかけていらっしゃるんですか。

稲葉さん：ありがとうございます。

1年生、2年生、3年生の学生たちがポスターなどをつくり上げて、地域の小学校などに配らせていただいております。そちらのポスターやホームページなどで呼びかけて、みんなに来ていただいている状態でございます。

市長：ありがとうございます。

お二人は、それこそ、将来、社協のコーディネーターになりたいとか、あるいは、保育士さんになりたいということで、福祉だとか保育などを学んでおられる学生さんばかりでありますので、その方が1,200人も麻生区地域に住んでおられるということは、この2つの職業とも地域なしには語れない職業ですよ。

それを今のうちから実践に移していただいているというのは非常にありがたいことなのですが、これって年に1回ですよ。何月でしたっけ。寒い時期だったですよ。

渡邊さん：2月。

市長：2月ですよ。2月なのですが、日常的に1,200名の学生さんたちが地域にもっと入ってくると、僕たちはもっとうれしいと思うのですが。

ミニたまゆりの説明をしてくれたんだけど、それ以外に地域のことで何かやっていることってありませんか。

稲葉さん：地域の活動といたしましては、うちの大学では、川崎フロンターレの託児施設でボランティアなどを行っております。実際に私もそちらに行かせていただいて、さまざまな学びを得て帰ってきたんです。

そのほかに、ほかの大学には少ないと思うのですが、地域交流センターというものがありまして、そちらでさまざまなボランティアの紹介などもさせていただいております。大学の学生がそこに来て、ボランティアは何があるのかなどを調べたりということで、学生たちも積極的に行っております。

市長：ありがとうございます。ごめんなさい。知らなかったです。こういう活動もしていただいているのですね。

今回、ミニたまゆりをやっている実行委員会の人たちは、先ほども言った、サークル化しているということですか。団体化しているんじゃないかと、有志の個人個人が毎年集まってくるという形なんですか。

稲葉さん：ありがとうございます。

大学は1年から4年と4年制の大学なのですが、1年生のうちには授業の一環としてやらせていただいております。1年生のときに、もうちょっと深くかかわりたいなと思う学生がいたら、そしたら、2年生や3年生になっても積極的にかかわるといことで、後輩と先輩としてのかかわりが深くあるので、長く位置づけさせていただいておりますイベントとなっております。

市長：ありがとうございます。

見ていただいておりますとおり、子供たちがたくさん来て、世の中の仕組みを知ることなのですが、稼いだお金で給料をもらって、それを使うと。最後、税金まで納めるということで、子供のうちから世の中の厳しさも教えるというすばらしいプログラムになっていて、全国で表彰されたと言われていましたね。本当にすばらしい取り組みだと思います。ありがとうございます。

これは学校の授業としても成り立っているということですよ。ですから、継続性は担保されているという理解でよろしいですか。

稲葉さん：はい。

市長：ぜひ継続して、川崎の子供たちに職業観というか、そういうふうな世の中が動いているんだというきっかけを教えてください、いいきっかけを、これからもぜひよろしくお願ひしたいなと思っています。

最後の質問で、学生さんたちのどのぐらいの割合の方たちが参加しているのですか。

稲葉さん：ありがとうございます。

うちの大学は人間福祉学科と子ども未来学科というものがあまして、その中で、人間福祉学科は必修の授業となっております。1年生は何らかの形でミニたまゆりに参加させていただいております、2年生、3年生、4年生になっていきますと、人数は減ってしまうのですが、自主的に参加する学生は多くいます。だから、大体半分ぐらいの大学の学生はミニたまゆりに貢献しているという形となっております。

市長：ありがとうございます。

先ほど御要望いただきました、市議会のサポートのことについては、市議会議長のほうに私からお伝えさせていただきたいと思ひます。私ができることはしっかりさせていただきたいと思ひます。

特に、川崎市内の食品サンプルの田中さんもすばらしい事例ですが、川崎にはすばらしい、子供たちに見てもらいたいものづくりのマイスターの人たちがたくさんいるので、ぜひ御紹介させていただきたいなと思ひます。ありがとうございます。

渡邊さん：お願ひいたします。

市長：それぞれの学校でやや短目にやっていますが、最後に、いろんな形で、フリーにディスカッションの

時間を少し長目にとりたいと思います。

司会：それでは、続きまして、日本映画大学の皆様から、白山地区や新百合ヶ丘地区での地域上映会、園芸倶楽部の取り組みについて発表をお願いいたします。

原田さん：皆さん、こんにちは。日本映画大学学友会執行部で会長を務めています原田涼です。

では、まず、私から簡単に日本映画大学の説明をさせていただきます。

日本映画大学はもともと専門学校でした。横浜放送映画専門学院というのを、1975年、今から40年ぐらい前に、今村昌平監督という、「うなぎ」とか、「檜山節考」とか、「復讐するは我にあり」といった映画をつくられた映画監督なのですが、その方が2年制の専門学校を横浜につくられました。

それが、10年後の86年に、日本映画学校として、今度は3年制の専門学校としてスタートします。そのときに、川崎市と小田急電鉄の協力を得て、今の百合ヶ丘校舎なのですが、百合ヶ丘駅の北口を出たところに新しく校舎を設けて、そこで日本映画学校として再スタートを切ります。

そして、最近ですが、2011年に、それが今度は4年制の大学として日本映画大学という形でもう一度再スタートを切って、今に至るといのが日本映画大学の簡単な歴史の流れです。

ここからは皆さんにお配りした資料を参照しながら話を聞いていただければと思うのですが、私たち日本映画大学学友会執行部、学友会は、一般社団法人白山まちづくり協議会の方々と親密な関係を築かせていただいております。

このまちづくり協議会とは何ぞや、という話なのですが、日本映画大学が、日本映画学校、専門学校から大学にかかわるときに、新しく白山に校舎をつくったんです。

その白山校舎というのが、実は、もともと白山小学校という小学校でして、その小学校が廃校となって、次、小学校の跡地に何をつくらうかという話になったときに、日本映画大学が専門学校から大学になるので、新しく校舎を白山につくりたいということでお話をしたところ、何回か協議を重ねた上で、白山キャンパスという形で新しく校舎をつくらせていただきました。

そのときに、自治会やマンションの管理組合の方たちが集まって、白山地区跡地利用検討委員会というのが形成されて、そこと日本映画大学が何回かお話をして、今の形となったということです。

その跡地利用検討委員会というのが、日本映画大学が白山に誘致された後に、今度は一般社団法人白山まちづくり協議会ということで、映画大学だけではなくて、愛児園という児童養護施設とかも白山にあるのですが、そことつながりをして、文字どおり、今、まちづくりを行っているという団体になっています。学友会は、まちづくり協議会の方々と仲よくさせていただいているということです。

活動の一つが、1、地域上映会というところを見ていただきたいんですが、学友会は、まちづくり協議会の方たちとともに、毎年初旬、1月から2月ぐらいに地域上映会を行っております。この上映会は、昨年までに5回なので、日本映画大学になってからほぼ毎年行われてきたということです。

学生が上映する映画、つまり、学友会のメンバーが上映する映画を1本選択し、それを白山校舎のちょっと大き目の教室を利用して上映するという形で行われます。ここに大学の周りに住んでいらっしゃる地域の方々をお呼びしたりとか、あと、学生も呼んで、みんなで映画を見るという上映会を行います。

昨年は、川崎市内にある高齢化の進む団地取材したドキュメンタリー映画、「桜の樹の下」という映画を上映しました。実は、この映画を監督したのは、今の日本映画学校の出身者である田中圭監督と、あと、島田隆一プロデューサーというのも日本映画学校出身の方なのですが、そのお二方を会場へ招いて、トークショーなども開きました。

このトークショーでは、先ほど高齢化の進む団地取材したと申し上げたんですが、白山校舎の周りにあ

る団地でも、実は、高齢化というものが一つ大きな問題となっていて、その映画とうまくマッチして、親近感というか、そういった感じでお話をさせていただいたということです。

感想が2ページ目に載っています。実は、ほかにもたくさんいただいたのですが、その中の3つを選んで、ここに載せました。

この上映会は、先ほども申し上げたんですが、学生、地域の方は無料で見ることができます。ですが、どうしても映画を上映する際に、上映するためのブルーレイやDVDをお借りするためにお金が発生してしまうんです。

ドキュメンタリー映画であると大体5万円ぐらにかかるとはありますが、そのお金というのは、地域の方々による寄附金、カンパで助けていただいているということで、上映会自体は地域の方々から支えられているというのが一つの特徴です。

今、地域から卒業生を送り出すというところなんですが、3月中旬に行われる卒業式では、地域の方々からも卒業生の門出を祝っていただいています。その一つに、餅つき大会と豚汁づくりというのがだんだん毎年恒例になってきていまして、学友会の学生とまちづくり協議会の方たちが集まり、卒業式が終わった後の祝賀会、パーティーで、卒業生へ手づくりもお餅と豚汁を提供しています。餅つきは、卒業生みずからもつくことができ、会場を盛り上げました。

実は、餅をつくためには、杵とか臼、あと、もち米を実際にかまどでたくのですが、かまどとかもまちづくり協議会にあるものをお借りして、豚汁の鍋とかも協力していただいて、一つのイベントを行っているんです。

実は、今年、本学の白山校舎で、日本映像学会ということで、映像系のことをやられている学校の教授の方などがうちの大学に来て学会を開かれたんですが、懇親会でまちづくり協議会から学会の参加者へ豚汁が提供されるということで、つまり、他大学の教師も地域の方々が快く迎え入れてくださったというのが、感謝というか、本当に毎回ありがたいなと思いつつながら、おつき合いさせていただいています。

最後、3番。なぜ地域に根差した大学をそこまで目指すのかという話なのですが、日本映画大学は、先ほどもお話ししたとおり、白山校舎が旧白山小学校にあったということもあって、特に、地域との結びつきがもともと強い大学です。

でも、その一方で、映画をつくるという作業には地域の方の協力や理解が不可欠です。なぜなら、映画の撮影をしていけば、当然、現場周辺、例えば、道路で撮影をしていけば、道路をふだん使っていらっしゃる近隣の方々とか、あと、公園であれば、公園をふだんつかっていらっしゃるお子さん、喫茶店であれば、ふだん、喫茶店に行っている常連のお客さんとかにどうしても迷惑がかかってしまうんです。

しかし、まちづくり協議会を含め、住民の方々、商店街の方々は快く私たちにロケ地を提供してくださっています。そういったことへの感謝、あるいは、人と人がつながることの大切さを私たちは地域とつながることで学んでいます。

また、地域上映会のところでも述べたように、現在、映画大学周辺の団地は、高齢化が進んで、大きな問題となっています。それは、川崎市とか麻生区だけではなくて、今、日本の問題ともなっています。将来、私たちが大学を卒業したときに、この町に住みたいとか、この町で結婚して生活をしていきたい、そういった人々が安心できる、魅力のあるまちづくりをしていくために、私たち学友会は、地域の方に対する一種の恩返しとして、地域に根差した大学を目指して活動しています。

というのが学友会の紹介でした。

では、もう一つ、園芸部からお願いします。

上清水さん：皆さん、こんにちは。日本映画大学にある園芸倶楽部ということで、まだサークル化はしてな

いのですが、有志が集まって活動を行っています。

簡単な紹介をさせていただきたいんですが、どういう活動をしているかという、まず、何で映画をつくる大学に園芸倶楽部というのがあるのかということなのですが、専門学校時代に農村実習というのを実はやっております、そのときに、なぜ農村実習をするのかという、野菜をつくったり米をつくったりするのは映画づくりに通じるところがあるということで始まったのが農村実習です。

今、大学になって、農村実習をやってはないのですが、そのときの意思を受け継いで、細々ながら、園芸倶楽部として活動しています。

立ち上げたのが、大学になって、1期の先輩なんですが、その方が立ち上げてくださって、今、私たち後輩が受け継いでいます。

簡単に、どんな活動をしているのか、写真を使って説明させていただきます。

これは、ちょうどグラウンドの片隅にある園芸倶楽部の畑なのですが、写っているおじいちゃんが、ミヤザワさんという、新ゆりグリーンタウン、ちょうど向かいのマンションに住んでみえる方なんです。主にその方の管理でお世話になっているのですが、畑をつくっております。こんな感じで、いろんな野菜を育てています。

あと、焼き芋会というのも、地域の方の協力で、今年の1月24日、園芸部でつくった焼き芋と地域の方の協力で、子供たちを呼んで焼き芋会を行いました。こんな感じで、たくさんとれました。

これは地域の方です。

これは流しそうめんをやったときのものなのですが、ミヤザワさんが竹を切ってくださいって、そこに水を流して、さっき学友会のほうから愛児園さんの名前が出たんですが、児童養護施設愛児園さんのほうでお招きいただいて、そこで竹を組み立てて、実際に流しそうめんを行いました。こんな感じで、子供さんもすごく楽しんでくださいました。

これは園芸部のメインイベントなんですが、毎年、白山納涼祭というところにお声をかけていただいて、ブースがあるんですが、模擬店のブースを1つお借りして、毎年園芸部のほうで、畑でとれた野菜を使ったメニューを出したりとか、時にはちょっと変わったものを出したりとかして、去年は・・ジュースをつくって出しました。こんな感じです。

あと、こちらの写真は、秋に行われているしんゆりマルシェというイベントなんですが、こちらのほうにも去年参加させていただいて、畑でとれた野菜を地域の方に販売をして、いっぱい買っていただきました。

こんな感じで、お芋もとれたので、お芋とかはラディッシュがよく売れました。

以上で園芸倶楽部の説明を終わります。

日本映画大学の説明はこれで終わらせていただきます。ありがとうございました。（拍手）

司会：ありがとうございました。

では、市長、お願いいたします。

市長：どうもありがとうございました。

日本映画大学が日本映画学校から大学になって、川崎に移ってきてことしで30年ですよ。この30年間の間に多くの映画人を川崎の新百合ヶ丘から輩出できているということは、川崎にとっても、あるいは、麻生区新百合ヶ丘にとってもとても誇りだと思います。

さらに、こうやって地域とのかかわり、この大学があるのも地域のおかげであつたりしますので、そういった意味で、お互いいい関係をつくり上げていくというのはこれからも大事なことだと思っていますし、いい活動をしていただいていると思っています。

地域の方で日本映画大学にかかわっておられる方っていらっしゃいますか。
何か少しコメントをいただいてもよろしいでしょうか。

伊藤さん：グリーンタウンの中にありました白山小学校の跡地として映画大学が入ったんですが、そのころからまちづくり協議会としまして自治会と管理組合から何人か出まして、私もその一員なのですが、ずっと地域とのかかわり合いということで、この写真にもありますが、餅つきとか豚汁とか、全部携わってきました。

学生の皆さんと親睦というか、地域とのかかわりをずっと続けていきたいなと思っておりまして、入学式、卒業式にも餅つきとか豚汁などを協力して、提供させていただいて、そして、学生さんと仲よくやっていきたいなと思って、やっているところでございます。

市長：どうもありがとうございます。

小学校、中学校であれば、地元の子供たちを卒業式で送り出そうとか、お祝い会をやろうとかというのがあるんですが、大学でもってこんなに地域の人から卒業生を送り出す機会というのは余りないんじゃないかなと。全国を見ても余りないと思いますが、それだけ大学が愛されているということでしょうし、皆さんも地域を愛していただいているんだと思います。

これからもかかわり合いをよろしくお願ひしたいと思います。ありがとうございます。

司会：それでは、最後に、和光大学の皆様から、黒川地区でのサトヤマアートサンポ、岡上地区などでのかわ道楽の取り組みについて発表をお願いいたします。

山本さん：このたびはこのような場にお招きいただきまして、ありがとうございます。きょうは、現在、和光大学で行われている地域活動を2つ御紹介したいと思います。

まず最初に、昨年黒川でスタートされたアート展示企画、サトヤマアートサンポについて発表したいと思います。

発表は、私、山本と高橋が担当いたします。よろしくお願ひいたします。（拍手）

高橋さん：まず、サトヤマアートサンポについて説明します。

サトヤマアートサンポは、ここから唐木田行きの電車に乗って、黒川という駅でやっています。

黒川には明治大学の農場がありまして、11月の頭、1週間目くらいのときに収穫祭というイベントをやっています、それに合わせて、黒川駅から明大の農場までの道のりにアート作品を点在させます。農村が広がっているのですが、その道のりと周りの土地を活かして、野外に作品を展示するということをやっています。

イベント自体、去年が初めてでして、お試し期間ということで始まりまして、正式に今回から続けていくんですが、初めてなので、いろいろ反省点とかがあったわけです。

卒業生を中心にと書かれています、これに反して、ことしからは、在校生、あとは、ゼミ単位でかかわっていくという形をとります。

作品なのですが、写真が小さくてわからないかもしれませんが、向かって右側は、卒業生の女性の方で、プロを目指して作品をつくっているような方に協力してもらってつくってもらいました。

これは炭を使っているのですが、黒川というのは、黒川炭という炭を生産していた歴史がありまして、それを加味した作品というものをつくってもらっています。

これも作品です。波紋というのが右側に出ていますが、黒川の明大農場付近に水の湧き出ているところがありまして、白くぼつぼつと見えるのが、陶器で水の波紋をつくったのですが、これも卒業生のOGの方がつくってくれました。

発表した4作品以外に、ほかに3作品出して、計7作品を去年は展示しました。

これは教員なんです。黒川農場は竹林とかがいっぱいあるので、地元の竹を実際に切り出してきて、ドームをつくと。これはつくっている風景ですが、ドームを地域の方と一緒につくって、できたドームも作品として道中に展示しました。

感想も去年少々もらっております。

流れというのは、左側の竹林に学生みずからが染色したものを張り巡らすという作品だったんですが、よかったよという声ももらいましたが、課題もありまして、インパクトが足りないんじゃないか、もっと大きいのがいいですか、そういう課題もありました。以後、改良の余地があるんじゃないかなと思います。

学生からとしても、今後、自分のほうに活動の経験をフィードバックしていくこともできますし、ワークショップなんかは特にそうだったのですが、地域の方とのつながりもありますし、プラスにはなるだろうと思います。

あとは、作品を展示するというときに、それこそ、音楽とか映画とかだとテレビとかで日常的に流れていますが、こういう作品とかはいわゆるアートです。というのは、なかなかメディアとかでも日常的に流れているわけじゃないので、知っている人は物すごく好きとか、知らない人は全然知らないとかいうのもあるので、つくっている側としては、訪れてくれる万人の方に楽しんでもらいたいので、それを目指してつくりますが、なかなかそこは差があるかなと思ひまして、そこも課題ではあります。

では、次は、かわ道楽の活動に移ります。

高瀬さん：先ほど紹介にあずかりました、和光大学・かわ道楽の環境保全サークルの高瀬です。

かわ道楽が行っている活動は、主に大学周辺にある鶴見川や大学キャンパス内の逢坂山、岡上和光山緑の保全地区や大学裏手のお伊勢山などで活動しています。

また、環境保全以外の活動も行っていて、夏には鶴見川のクリーンアップ活動で地域の子供たちと川遊びをしたり、毎年7月には納涼祭、1月にはどんど焼きといった町内会主催のお祭りで地域の人たちと交流をします。

これが普段行っている活動で、左側の写真が子供たちとのクリーンアップ活動で撮られた写真です。右側がふだん大学裏手の山で行われている活動の1枚です。

納涼祭についてです。毎年7月に行われる納涼祭では、かわ道楽は、やぐらの飾りつけや会場設営のお手伝い、町内会の屋台で売る焼き鳥を焼いたりします。

また、私たちのブースでは、冷やしうどんの販売や、かわ道楽が1年間行ってきた活動がまとめてある「かわ雑誌」の配布をします。こちらの「かわ雑誌」は、岡上の地域の人がつくってくれたデザインのロゴが使われています。

鶴見川でとれた魚の展示なども行っています。

また、納涼祭で行われる盆踊りは、日頃、西町会の人たちと盆踊りを練習した学生がやぐらに立って一緒に踊ります。

どんど焼きでは、毎年1月に行われている、「せいの神」と呼ばれる、竹と笹で組み立てられた祭壇を西町会の人たちと一緒に作ります。

また、当日には、西町会の人たちと臼と杵で餅をついたり、トックという韓国風のお雑煮とお汁粉をつくり、無料で提供しています。

また、この時期には、かわ道楽の世代交代の時期なので、新しいかわ道楽の中心メンバーが西町会の方々に挨拶をする日でもあります。

左側が納涼祭の写真で、右側がどんど焼きの写真です。

以上でかわ道楽の紹介を終わります。（拍手）

司会：ありがとうございました。

では、市長、お願いいたします。

市長：和光大学の皆さん、ありがとうございました。

最後のかわ道楽の皆さんの納涼祭だとかどんど焼きとかというのは、岡上西町会の人たちと物すごくかわっているなと感じました。

岡上西町会の方はいらっしゃいませんか。

岡上町会の宮野さんがいらっしゃいます。宮野さん、ちょっとコメントをいただいてもよろしいですか。

宮野さん：岡上町内会長の宮野です。

実は、どんど焼きのやぐらの真ん中の手前に赤いジャンパーを着て写っているのが私だと思います。

毎年12月までに、私のほうは、桃の枝を1年間乾燥したものを結えて、どんど焼きのたきつけの中身のあんこにします。

1月の初めにやぐらを立ち上げて、岡上の3カ所でやっているのですが、西町会、和光大学、あと、岡上町内会の川井田の地区の人たちが参加してやるんです。12メートルぐらいの立ち上げをやるのですが、岡上の中では一番背の高いものではないかと思えます。

そういうことで、先ほど学生さんが西町会とも地元の交流としてやっていますということなのですが、岡上町内会の一部も参加していますので、ぜひ忘れないでいただければと思います。

市長：宮野さん、若者がというか、学生さんがどんど焼きだとかに参加してくれるということを、どういふふうにお感じになっておられますか。

宮野さん：もともと、どんど焼きは、私が子供のころは、小学生の高学年から中学生がつくっていたんです。ですから、元に戻ったような感じがします。

確かに、大人が大勢参加するんですが、若い人たちが中心になって立ち上げるのは非常にいいと思っています。

市長：ありがとうございます。

若者がいないどんど焼きというのはどんど焼きじゃないということですよ。

宮野さん：はい。

市長：ありがとうございます。

高橋さんから最初に説明があったサトヤマアートサンポは、知っている人は知っているけれども、知らない人は知らない。作成しているほうとしては、もっと多くの人たちに知ってもらって楽しんでもらいたいなというコメントがありましたが、もっと知ってもらうためにはどういふふうにしたらいいと思えますか。

高橋さん：去年はフライヤーとかをつくって、それなりのPRはしたんです。原因はわからないですが、単純に知名度だと思うので。あと、収穫祭とタイアップしているような形になっているので、そこと連携して火がつくのがいいのかなと思っています。

市長：なるほど。明治大学と和光大学のコラボレーションというのもおもしろいなと思ったのですが。

今、町会の皆さんがいらっしゃると思うのですが、このことを知っていたという方は手を挙げていただいていいですか。

30名ぐらいいらっしゃると思いますが、そのうちの2名の手が挙がりました。

ということで、麻生区の方はまだまだ知名度が足りないということは、地域の皆さんと連携すると一気に知名度が高まるということだと思います。麻生区の自治会の主だった幹部の皆さんがきょう集まっていますので、少なくとも、アートサンポはもの凄い知名度が急上昇すると思います。

こういう形で、自分のところでやるということは本当にすばらしいことで、明治大学ともコラボするとさらに輪が広がった。でも、地域とつながるともっとつながって、高橋さんたちがやっている取り組みがもっともっと多くの人たちの目に触れて、楽しませることができんじゃないかなと、感想として私は思いました。

まだ去年1回目ですもんね。

高橋さん：去年はお試しという形で、正式な形じゃなかったもので、今回は第1回目という形に実質はなると思います。

市長：ぜひ第1回目を大いに盛り上げていただきたいと思います。ありがとうございました。（拍手）

司会：では、これまでの発表から、麻生区のさまざまな地域において、若者が地域活動に活発に参加されている状況がわかりました。

それでは、ここで、地域活動の中心を担っていただいております町会、自治会の立場から、麻生区町会連合会の皆さんに、これまでの発表を踏まえて、何か御意見、御感想などを伺えればと思いますが、どなたかお願いできますでしょうか。

高橋さん：大変きょうは感動いたしました。麻生区町会連合といたしましては、本当に4大学の皆様が、地域の町会、自治会がかかわっているということも心から安心いたしました。皆さんのすばらしい活動がまだまだ広報が行きわたっていない。

私は「町連だより」のほうの委員をやっております。一つの提案として、「町連だより」は、麻生区の町会、4万8,000世帯でしょうか、全各戸に行きわたっております。

「町連だより」の発行は、2月、7月、11月、年3回なんです。この月の1カ月前ほどまでに、地域振興課、中村課長のほうにお電話いただければ、優先して、皆様のこんなすばらしい、麻生区では、こんなに未来の子供たち、未来が育っているということが本当にうれしく思いましたし、ありがとうございます。はいです。

優先して皆様の活動を支えていきたいという思いで、中島会長もいらっしゃいますので、掲載させていただきます。そうしますと、皆様の活動にもっともっと多くの麻生区の皆さんが見学とか参加させていただきたいと思っております。

きょうは本当にありがとうございました。（拍手）

市長：町連の高橋さんからすばらしいお話をいただいて、和光大学の高橋さん、すごい心強い発言だったと思いませんか？

一気に4万8,000世帯配られているということですから、和光大学の活動ももの凄く増えると思えますし、他の3大学の皆さんにも、地域振興課の中村課長まで言えばいいんでしょうか、区役所のほうに言っていただければ、高橋さんのほうに伝わって、「町連だより」にも載せてもらえるということですので、ぜひ積極的にかかわっていただければなと思います。

司会：ありがとうございました。

それでは、全体を通しての意見交換及び本日のまとめについて、市長をお願いいたします。

市長：まだ4時45分まで時間がありますので、ここからはかなりフリーなディスカッションをしていきたいと思うのですが、今、高橋さんから御意見はいただきましたが、せっかくこんなに町連の皆さんが皆さんの活動を見ていただいた、あるいは、きょう初めてこの大学はこういう活動をしていただいているんだということを知った方も多いかと思います。ここがやっぱり大事だと思うんですね。

多世代だとか、あるいは、いろんな主体の皆さんがこうやって交わることによって、いい地域ができてくるということだと思いますので、ぜひ高橋さんに続いて言うておこうという方がいらっしやいましたら、手を挙げていただけますか。

はい、どうぞ。

山田さん：細山町会でございますが、大学があるのは知っていたのですが、実際にああいう形でいろんな活動をしているということを初めてきょう聞きまして、非常に参考になりました。

ただ、細山というのは大学というのがありませんから、正直いって、私ども町会活動をやっていて、今の若い人は全く町会に対して興味がないという感じかないんです。

しかし、関わっているというのは、その地域の町会とは重なっているんですが、我々としては全く関わってないわけです、正直いって。

したがって、皆さん方もそれぞれ学生でいて、住まいが麻生区じゃないところもいっぱいいると思うんですが、できれば、学生の中で、麻生区の細山とかいうところに住んでいる人たちも、少しは町会のことに興味を持ってもらいたい、こんなことをお願いしたいと思います。よろしくお願いします。（拍手）

市長：ありがとうございました。

細山の地域は大学がないとおっしゃいましたが、麻生区で6大学のネットワークがあるので、これだけのネットワークがあるというのは、全国から見たら、怒られるぐらいあります。ですから、どうやってうまく活かしていくかというのは、きょうはすごくいいきっかけが生まれているのではないかと思います。

というのは、大学生たちがこういう活動をしているのかということを知っていただいた町内会の皆さんもそうですし、町内会活動をしている人たちがこんなにたくさんいるというのも、逆に学生さんたちに知っていただいたんじゃないかなと思っています。

ですから、これをきっかけに、麻生区の区役所も一つの主体として深くかかわって行って、お互いをつなぐ役割をこれから担っていきななと思っています。

先ほど地域活動への参加のアンケートという御紹介をしましたが、ボランティア活動についてもアンケー

ト調査をやっています。何らかのボランティア活動に参加しているという方は19.7%、参加していないという方が80.1%です。

参加していないという不参加の理由上位3位は、ボランティア活動に参加するきっかけがない。これが35%です。ボランティア活動に参加する時間がない、33%です。活動に興味がない、18%。

参加する時間がないというのは、大学生もバイトとかいろいろあるし、大変なことはよくわかりますが、第1位が、参加するきっかけがなかったというのが一番上位であるということは、今お話しいただいたように、お互いのことをよく知らなかったということが一つの大きな原因なんじゃないかと思います。

そういう意味では、ここに集まっている学生さんたちは既に行動を起こしている人たちなので、ここからどう次々と波及させるかということが課題なんじゃないかと思いますが、稲葉さん、どういうふうに思いますか？

自分の周りでもっとボランティアに引き込むというのは、どういう難しさがあって、あるいは、どんな可能性があるだろうか。どんな考え方でもいいですから。

稲葉さん：ありがとうございます。

ボランティアに関してですが、周りの学生とかを見ていると、きょうバイトが忙しいとか、自分の忙しさというのはあると思うんですが、そういう学生もいれば、積極的に福島にボランティアに行ったりという学生もいるので、そういう学生たちが自分たちはこういうふうに頑張っているんだというのを周りにアピールしていくことで、こんな活動があるんだと知るきっかけがうちの大学はたくさんあると思うので、自主的にボランティアに行きたいという学生がうちの大学は多いのは、そういうことかなと思いました。

市長：なるほど。

実は、アンケートを細かく見ますと、学生のボランティア参加で一番大きいのは清掃活動です。清掃活動は、実は、町内会の皆さんとか、ほぼ日常的にやっておられます。学生は学生だけでやっている清掃活動というのが実は多いんじゃないかなと思いますが、近くの、それこそ、今度、細山地域に行って清掃活動に参加してみようという機会でもあってもいいんじゃないかなと思いますので、ぜひこういう情報を、うまく、正しく伝えていくということで、僕もそうですし、区役所もそうですし、地域の皆さんも、みんなで協力してやっていきたいなと思います。

小川さん、田中さん、どちらでも結構ですが、どうですか。ボランティアを知るきっかけがないということは感じますか。

小川さん：はい。

市長：感じている。

小川さん：今回発表させていただいたURさんの集会所での音楽療法も、まさか集会所で一般の方に向けて音楽療法をやってもいいんだということも、お話をいただくまでは知らなかったもので、先ほど市長さんがおっしゃったみたいに、お互いが知らないから起きてしまっていることだと思って、私たちは何かしらのきっかけがあれば参加したいと思っているのですが、町内会の方たちは学生は興味がないと思ってしまっている。だから、もう少しお互いがアピールをしていければ、私たちみたいに活動が一つできるきっかけになるんじゃないかなと思いました。

市長：そうですね。今、まさにおっしゃっていただいたように、私たち外に出て行っていいんだと、やっていいんだということで、呼びかけられて、初めて何となく、あ、そうかと思ったということですね。

小川さん：はい。

市長：山本さん、いかがですか。

山本さん：まずボランティアということなんですが、普通に大学で生活していると、そういった情報は限られた場所でしか得られないので、全ての学生が情報を得られるように、地域の方々と区役所の方々と大学内で連携していく必要があると私は感じました。

市長：なるほど。

もう少し身近に、来週、こういう地域イベント、ボランティア活動があるんだけどなというのがあると、来週の土曜日あいているなど思えるから、そういうのがあると少しはきっかけになりますか。

山本さん：何もなければ絶対に行きやすいと思います。

市長：高瀬さんからすると、どういうところで情報を得るのが一番参加になりますか。口コミですか、あるいは、チラシですか。どういうものが一番効果的だと思いますか。

高瀬さん：自分は、納涼祭とかどんど焼きとかはかなり大きいイベントだから、普通に近くを通ったら行きたくなっちゃうと思うんです。そういうところで、地域の人たちと学生の関係性を図っていただけたいなと思いました。

市長：逆に、高瀬さんの友達はどうやって誘っているの？友達で、一緒にどんど焼きに行こうぜとか、納涼祭を手伝おうぜというのは、どういうふうに誘うの？

高瀬さん：納涼祭は、普通に焼き鳥とかが出ていたので、食いに行こうよって。

市長：食べ物でつれるわけですね。

高瀬さん：そうですね。

市長：なるほど。

例えば、美化活動に参加しようといったときにはどういうふうな誘い方をします？誘えるかな、食べ物なしでも。どう？

高瀬さん：考えていきたいです。

市長：どういう誘い方、どういう情報の得方というのが参加を促すきっかけになるでしょう。渡邊さん、どうでしょうか。次、原田さんに行くから、考えておいて。

渡邊さん：1人じゃ参加しづらいという子が多いと思うんですね。初めての子とかは、何をしたらいいんだろう、誰を頼ればいいのかと考えるとと思うんです。

私もボランティアを最初やったときは、川崎市主催のものだったんですが、1人で中学2年生のときに行けない。恥ずかしい、ちょっと入りづらいと思ったので、お兄ちゃんを誘って行きました。

なので、誰かが一緒に清掃活動をやろうと声をかけてくれれば、あの子はやるんだ、じゃあ、私もちょっとやってみようかなと思うことができるんじゃないかなと私は思います。

市長：なるほど。年齢的にも近い人が誘ったほうが一緒に行きやすいということですか。

渡邊さん：親しい人、もしくは、家族の方とかと一緒にやろうとってくれれば、わかった、暇だし行くよみたいな感じになったりとか。

マンションとかだと結構つながりが強いと思うので、紗菜ちゃん、一緒に行こうと言われてたら、わかりましたとなると思うんですよ。

人は1人じゃ行きづらい。でも、誰かがいれば、じゃあ、やろうかなと思うことが強いんじゃないかなと私は思います。

市長：なるほど。

原田さん、どうですか。

原田さん：僕も、実は、関東に出てくる前は愛知に住んでいまして、そこでボランティアとかはかなり参加していたんですが、先ほどお話しされていた、清掃活動とかいうこともやっていたりして、でも、実際、清掃活動は、悪い言い方をすると、ごみ拾いみたいな、あまりいいイメージがない。

何でやる人がいるんだろうと。自分が所属していた団体は高校生ばかりの団体だったので、高校生でもたくさんやる人はいたんですが、何でやるんだろうと思っていたら、ごみ拾いということがおもしろい。それ以上に、誰と一緒にやるかということだと思えます。一緒に参加している団体の友達と何かをすることがおもしろいとか、誰かと何かをやると。映画も誰かと何かをつくるということで、その行為が多分楽しいんだと思います。

なので、そういうおもしろさというのを、今、地域のことについて紹介させていただいたんですが、正直、地域とかかわっているのも学友会のメンバーだけで、余り学校の中には浸透していないところがあるので、お友達を誘ったりとか、そういったところを広げていけたらなと思っております。

市長：だから、ボランティアにも楽しみがないとなかなかきっかけがつかれないということですよ。

原田さん：そうですね。でも、今まで自分もボランティアはいろいろ参加してきましたが、おもしろいんですが、何が自分の中でおもしろくて、そんなにはまってしまうのかというのが、正直ちゃんとわからないんですよ。でも、何かやってしまうみたいなのところがあって、気がついたらやっていたみたいなのところがある。

市長：なるほど。その言葉は、町内会長さんたち皆さん共感するんじゃないかと思うんです。みんな何かやらなくちゃいけないと思って、気がついたらすごくやっていた、地域のためにやっていたという感じなんじ

やないかと思いますが。

この前、ある記事を読んでいましたら、ごみ拾いをみんなで競争するというので、ごみ拾いゲームみたいなことにしておもしろくさせていたというのを見ましたが、単純に清掃活動より、それをゲーム化しちゃうという取り組みもあるのかもしれないね。

そろそろ時間が迫ってまいりましたが、この際、ぜひ一言言っておこうかなという方はいらっしゃいますでしょうか。

どうぞ。

曾我さん マイシティ新ゆり町内会の曾我です。

私、まちづくりにはいろいろかかわってきたのですが、高齢者福祉というのをある大学で毎年お話ししているんですが、生徒たちがこのごろ言うことには、ブログはないですかと言われるんですよ。私はペーパーが好きで、新聞はつくるのですが。

それはできないんですが、今の若い子たちというのは、それが一番ニーズに合っているのかなと思っていて、町会のほうもブログのできる人があって、こういう人が発信していけば、もうちょっと早くに広がっていくんじゃないかなと思いました。

市長：なるほど。ありがとうございます。

みんなどうですか。活動団体を調べるときネットで調べるとい人、どのぐらいいますか。ちょっと手を挙げてもらっていいですか。

それが大体調べ方ですね。曾我さん、そのようですね。そういうところに私たちも気をつけていかなくちやいけないというか、そういう情報発信のやり方も考えていかなくちやなかなか届かないということも教えていただく感じですね。ありがとうございます。

きょうは、6大学ネットワークのうちの4大学の方たちに来ていただいて、すばらしい地域での取り組みを発表していただきました。本当に皆さんありがとうございました。（拍手）

すばらしいそれぞれの取り組みをさらに継続してやっていただきたいと思いますし、違うボランティア活動とか地域活動が次々と生まれてくるように、皆さんの実践者たちがさらに広げていっていただきたいなということをお願い申し上げまして、きょうの車座集会を終わりたいと思います。

本当に御協力ありがとうございました。（拍手）

司会：それでは、まだまだ御発言の希望があるかと思いますが、所定の時間となってしまうので、これにて閉会とさせていただきますと存じます。